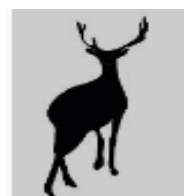


『児童心理』一九五二年六月（児童研究会／金子書房）

世相に抵抗する教育

矢口 新



(一)

世相に抵抗する教育という題を与えられたが、その意味は恐らく現代のなげかわしい世相の中にあつては、子供の教育はとかく不健全な影響を受け勝ちであるから、それに対してどうすべきかというようなことを問題にせよということであろう。

四月六日の朝日新聞の朝刊に、「子供を守る会」が横須賀音頭のタマラン節に抗議することになったことが報ぜられている。このタマラン節が歌われては子供の環境として誠に嘆かわしい状態だということからの一つの運動であるが、こういう問題が起るところに今日の世相の一面がよくあらわれている。具体的に子供を守る会としてあらわれて来るこういう低俗な歌謡曲に子供を守る会が抗議するということも当然であるが、これは世相に抵抗する教育運動の一つだということができる。

ところで、この「子供を守る会」というのは、日教組、児童文学者協会、主婦連合会、民主婦人協議会、愛育会などが参加して結成されるということであるが、子供の環境を守ろうとする一つの運動が、こういう形で出来上つてくるのもまた世相の一面であろう。

世相と教育の問題を考えると、社会の表面にあらわれてくる現象にだけとらわれて、それに抵抗する教育を考えるとという態度であつ

ては物の本質をつかみ得ないであろう。ここで世相という言葉に定義を与えるつもりはないが、相（すがた）というのは、要するに外面にあらわれているものを通じて内面のものを問題としているのである。人相などというときの相という言葉がよくそれをあらわしているが、ただ顔の外形、眼、鼻、口の恰好を問題にしては、それを通じて内面のものをとらえているのである。世相という場合もその点と同様であつて、ただ社会の表面に出でくる事実のみを問題にしては、それを通じて、その根柢にある社会の精神やその生活構造を問題にしているのである。

子供の教育について世相が問題となるのは、まさにこの点であろう。横須賀音頭が俗悪なものであつて、それがつくられ歌われ、流行するということになれば、確かに子供の環境として望ましくないものが形成されることになる。これは社会の現象であると同時に世相としてとらえられなければならないのである。この現象そのものに対して、抵抗する運動が起り、たとえば今回、「子供を守る会」が行つたように、抗議しあるいは歌詞を改め、あるいは撤回させるということも教育の活動として大切なことであろう。しかしこれが世相としてとらえられるならば、われわれの視野はさらに広く、深くなるであろう。すなわち現象に抗議し、抵抗することは、ただそれだけに對しては、あるいは成功するであろうが、しかしそれだけでそういうものが生み出される根源としての社会の精神や生活の仕方を問題にしなければ、相ついでそのような事件は起つて来るであろう。そうすると教育は後手後手となつて、次から次へと現象を追かけていなくてはならなくなるであろう。これは世相という考え方がないということである。これは教育を社会から遊離させ、教育と社会との間に溝をもうけて、教育が自分のからにとじこもることになつて行くのである。こうなると社会は教育に對して害を与えるマイナスの条件というように考えられ、しかも教育は独善的となり結局はみじめな敗北を喫することになる。所詮

教育は社会の中で行われるものであるからである。

ところが、その現象を世相としてとらえる見地があるとわれわれはもう少し根源的な方策をもつことができる。タマラン節という歌謡曲が現出するのは、それだけが問題なのでなく、そういう世相なのであると考える。社会にそういう考え方や生活の仕方があるのである。このことを計算に入れなければ、真に世相を問題にした教育活動ということにはならないであろう。現代の俗悪な世相に対抗する教育といっても、ただ現象を追いかけて廻しているという教育的抵抗ではお話にならないのである。

ジャパン横須賀ワンダフル、ビヤもガールもベリナイス、云々という歌謡曲は根も葉もないところに生れたのでなく、現在の日本がそういう生活構造の中にあることを物語っているのである。またかりにこのような歌謡曲が流行するということになれば、それは人々の心の中心に、そういうものを愛好するものがあるのである。少なくともそういうものをいとう気持ちがないから流行するのである。問題はそういう人々の心の中にあるというべきであろう。もし俗悪な世相に抵抗するということを考えるならば、そういうものに対して目を向けるべきであろう。しかしそうなると問題は大きいのである。現象を追かけるということとは、その意味ではまだ簡単である。場合によっては権力によつてこれを禁止することもできる。しかしそれがくさいものにふたということになれば、社会としては危険なる精神を内証せしめたということになって、教育的な解決にはならないのである。教育は人間の心の変化を問題としていたのであって、表向き目をおおっていたり、うわべはもつともらしいことを口にする人間をつくることでない。現実に社会の中にくさいものがありながら、ないかの如く振舞うというように教育された人間はかえって恐ろしい人間であろう。現象を追かけ、表面から裏面に、すなわち地下に潜行させることだけにうきみやつすならば、結果においてはそういう表裏のある人間をつくること

になり復讐をうけるのである。だからこれは政治だけでは解決のつかない問題である。やはり教育の問題であるといわなくてはならぬ。

自由が大切なのはそこにあるのであって、人々が自由に行動しながら、その中から健全なものと不健全なものを自覚的に選択しつつ、健全な精神を獲得してゆくことが教育でなくてはならない。

タマラン節の追放に民間の団体が起ち上つて抗議をしようとしていることは、この点から考えて興味深いことである。とくに主婦連合会とか、PTAとかが動いているということは、民衆の自覚としてとらえることができる。これが往年ならばすぐいゆる官権によつて処理することになるのである。それだけ現在はいより教育的な本質的な問題として取扱われる雰囲気が出てきているのである。しかしこの運動が、もし単に現象だけを追いかけて廻すことになれば大した効果は期待されないだろう。むしろこのことを通じて、自己自身のもっている生活構造や生活に対する考え方の基本を反省することになることが大切なことであろう。

大衆の生活がもっている不合理なもの不健全なものが根源的に反省され、自覚的な運動として大衆の生活改善運動が行われ、それを通じて自己教育がなされるということになって、はじめて俗悪な世相に対抗することも可能となるのである。俗悪な世相の現象に今ただちに手をつけてどうこうとすれば、それによつて教育が健全になるという如きものではないことに注意しなければならぬ。現在の俗悪性は、むしろ過去の教育に根本的なものがなかったことの結果であること、今そのつぐないをさせられているのだということに気付かなくてはならぬ。

パチンコが流行し、特飲街が至る所に出来上り、人身売買が平然として横行するということは、何れも皆そのような根柢のある現象であつて、その一つ一つを追いかけては片付く問題でない。それは特飲街や人身売買を行う人々の意識を問題としてみればただちにわかることなのである。そこには人間生活の根本に対するセンスのズレがある

のである。そういう時代物的センスを養って来る原因が今の社会にあるということが問題であろう。

そうしてそれらが奥深い所で児童の環境として、児童に対して大きな影響を与えていることの方が根本的な問題である。パチンコそのものが与えるものよりも、特飲街が児童の目にふれるより、その根柢にあるところの、大人がもっているとはく的な生活意識や、人生に対するその日暮しの態度が、また人間に対するヒューマニズムの欠如や、男女の間柄に対する封建的な態度や行動が日常生活において児童に影響を与えることが大きいのである。その点から児童の教育に対してはもつと巾の広い考察がなされる必要があるだろう。

(二)

一般に世相はこのように主として教育の外的条件として考察されているけれども、そういうことばかりではないのである。教育の動きそのものがまた世相を反映しているのである。

最近入学試験の問題で親が狂奔する姿が次第に目につくようになってきた。ようやく経済生活に落ち着きができたというところからであろうか。大学、高等学校の入学試験は申すにおよばず、中学校に対しても、さらには小学校や幼稚園に至るまで、親は子供をいわゆるよい学校に入れようとして狂奔している。教育に熱心な親といわれる人々が多くそういうことに骨を折っている。そうして学校の側でもそれにまきこまれたり、あるいは積極的に助長したりしている。こういう世相はいわゆる俗悪な世相ということには入らないとみえて、多くの親はなんらの関心も示さず、日教組も主婦連合会も、PTAも動ききかないのである。否、場合によっては奨励することも多いのであろう。

現象的にみれば、どの親もよい学校に入れようとして努力し、子供もそのために勉強し誠に結構なことであり、何も問題にすることではないかの如くである。

近頃聞いた話では、東京の都区内のかなり有名な幼稚園で、この幼稚園に入れておけば、附属小学校へ入れることができるということを知園長が親に向って演説したそうである。そして十人に一人の入園試験をうけさせて、合格した親たちは喜んでいたのである。こういう世相は教育熱心なあらわれとしてだけはおいてよいものだろうか。幼稚園時代のような幼いころから、小・中学、高等学校と子供たちはこのような雰囲気の中で育てられることが、人間を育てるゆえんになるであろうか。

子供に幼いときから、できるとか、できないとか、人よりすぐれることばかりに注意がむくようになり、よい学校とかわるい学校とかも皮相な見方できめるように育てられて行くのであろう。もつとも大切な、自分のできることに全力をそそぎ、他人と協力して社会をつくるということをお忘れ、ひたすら生存競争にだけ目を向けるようになるであろう。

幼稚園の子供に絵をかかせてみるとよくわかるが、無心に書いた絵は実によい絵をかくが、上手下手にとらわれたら、見苦しい絵をかくのである。親が上手、下手ということにばかり関心をもっている家庭の子供は概して、人間的なよさを表現している絵はかけないのである。こういう点は子供の育成に忘れてならぬことであろう。子供はいついかなるときも、自己の最善の力をふるうように育てられるべきであり、その結果はこれは人々の能力によつて異なるのである。結果だけにとらわれて表面を糊塗しようとするとはいけないことである。しかし成績の上下とか、よい学校への入学とかいうことだけが子供の中心の関心になると、子供はよい結果をつくらうと、うそをいい、成績物の点をごまかし、人のものをぬすみ見したりするのである。

このようなせせこましい人間が育つて来たら子供の将来は暗いといわなくてはならぬ。しかしそういう子供をつくるような世相なのである。こういう世相にはちよつと手の下しようがないのである。

今のような世相の現象面だけをとりえてそれに対して何か手はないかと考えても、そのことが子を思う親の盲目的な愛情と結びついていっただけに始末がわるいのである。それは人生のわたり方という人間のもっとも深い考え方に根ざしているものであり、それは日本の社会構造、生活構造と一体のものとなつているのである。だからおいそれとすぐきくような速効薬はなかなかないと考えられる。

それは狭い日本で人間がひしめき合つて生活しているというこの島国の条件も関係しているであろう。明治以来の日本の近代社会の成立過程において封建的な人間観社会観の遺つていられることも関係している。しかしだからといって、そのままに放置しておけば、依然として改らないままであろう。だからやはり手をうたなければならぬのである。しかし現象をおいかけて廻すのではなく、地についた抵抗ということになれば、これは時間をかけるより仕方ないことである。

時間をかけるということは、われわれ日本人にはきわめて不得意なことであるらしいが、実は大切なことである。今の世相を今すぐなんとかしようと考えても実はどうにもならないのであつて、これを十年間の計画で治療しようと考えた方がかえつて早いのである。

世相のことがだんだん世相と遠ざかる傾向になつてしまつたが、実は世相の転変というのはそう表面だけを気にしてみてもはじまらないことである。あたかも水を一杯入れた桶から、穴があれば水がとびだすようなもので、くさりかけた桶でこちらの穴をふさげば、こちらの穴から水がもるといった具合である。中の水をすっかりどこかへ移してしまふのが一番根本的な対策である。次から次へといろいろなものが社会の表に出て来て、それを追いかけていられるのも応急の処置としてやむを得ないが、同時にそれらの根本にふれた対策が必要なのである。

応急の処置が必要でないのではないが、それが積みあげられたら根本的の対策となるという一貫性がなければならぬであろう。断片的

な処置では積みあげられないのである。それはまず第一に大衆の中に教育ということについて、本質的な考え方が育たなければならぬ。大衆の地盤の上で教育ということに成立させることである。教育が教育者の手によつて独善的に運営されていることがもつともいけないことである。それが今すぐできないならば、今後十年間の計画としてでもよい。着々とそういう方向へ努力を続けることである。

最近逆コースなどよばれる一連の社会現象がみられている。これも一つの世相であるが、教育が多少でも民主化され、民衆の生活の中へ入つていつているという点に対して、逆コース的な考え方があらわれるならば、これはまさに教育の危機といわなくてはならぬ。そういう世相があらわれる根本の原因は、過去の日本の社会生活や教育の歴史の中にあつて、今ただちにこれを排除することはできないのかも知れない。だからいう如く逆コース的な教育が出現するかも知れない。しかし問題は、それもまた一つの世相であつて、その現象そのものより根源にある社会の精神や生活がとらえられるかどうかということにかかつていられる。表面の現象をなげくのもいいが、それを生み出したものに目をつけることであらう。

逆コースそのものは現象としてはまたときと共になすたれるであろう。しかしまたそれとちがつたものがつづいて生れるにちがいない。教育はもとより動くのであるから、動くのはよいけれども、浮草の如く動いているならば積み上げられるものはないであろう。そういうところでは子供は育つて行かないのである。最近の世相はそういうことを物語っている。

世相に抵抗する教育を考えたが、世相の中から、むしろ学びとる方が大切なようである。現象を追いかけるのではなく、そこから根柢にあるものをつかみとることが、結局において、世相を考えた教育であらう。

(国立教育研究所)